

話しかける様を印象的に描いている。第4楽章（変口長調）は、実家に帰ったヨゼフィーネに逢いたい気持ちをつのらせ、耐えることが出来ずに馬車で彼女の元に疾風（アレグロ）のごとく向かう様を描いている。

この様に、交響曲第4番は、1人の女性（ヨゼフィーネ）を絵画で見るが如くに描いている。女性の持つ本質的な特性（人間像）を、音の世界で表象したのは前人未踏の偉業と言えよう。シューマンは、この作品を、「ギリシャ神話の清純な乙女を連想する！」と評した。

この当時、ベートーベンが宇宙の彼方まで発散させるほどの強烈なエネルギーを、音楽の創造に傾注し、前述した極めて独創的な多くの作品を生み出すのである。ベートーベンは、ヨゼフィーネがこれらの作品を理解すれば、必ずや、彼女の永遠の愛を勝ち取る事が出来る、と信じていたであろう。そこに、ベートーベンの純粋な恋愛観を観た気がする。そして、それが、男性の普遍的な創造力の最も強烈な源であることを、私達は理解した。しかしながら、やがて、ヨゼフィーネがベートーベンを避ける態度を採る様になり、2人の交流は1807年の秋に終結した。

ヨゼフィーネは1810年に、子供達（4人）の教育を優先させ再婚するが、この結婚も彼女に幸福をもたらすことがなかった。彼女はやがて、財産を失って経済的に苦しくなり、1812年6月に親戚（母方）を頼ってプラハに向かい、当地でベートーベンと偶然再会したであろう。

ベートーベンは、ボヘミアに滞在している途中で、体調を崩しながらも作曲に専念するが、交響曲第8番の2楽章を作曲している時に、以前、ヨゼフィーネに逢いたい一心でウィーンから彼女の住む地に馬車を走らせた記憶が鮮明に浮かび上がったであろう。そして、この楽章に交響曲第4番の4楽章の手法を導入し、同じ変口長調、2/4拍子のソナタ形式で構成して、馬車を描写することによって、手紙の宛名、"不滅の恋人"、を特定する証拠としたのである！ 速度の違い、アレグレット（第8番）とアレグロ（第4番）、は年齢（41と35才）が異なることを表象したもので、彼は手紙（第3信）の中で、このことについて述べている。余談ではあるが、ベートーベンは、ボヘミア滞在中（7月19日）に、ゲーテと初めて会い、親しく歓談している。

第8番交響曲は、第2楽章のみが変口長調で構成されているが、ヨゼフィーネの全人格を表象した第4番では、3つの楽章（1,3及び4）がその調性で構成されている。これは、単なる偶然ではないであろう！ 従って、変口長調の調性は、ヨゼフィーネのキーワードと観るべきである。

交響曲第8と4番が、同一の女性にインスピレーションを得て創造されたものであることを理解して頂けたと思う。そして、宛名のない3通の恋文と関連づけて、後世の私達に難題を投げかけ、「解けるものなら解いてみよ！」、とばかりのことをベートーベンはやってのけたのである。

ヨゼフィーネは、その後不幸の一途をたどる。そして、1821年3月31日に、姉（テレゼ）の援助を受けながらも42才で命尽きてしまうのである。

残念ながら、当時の記録がベートーベンに残されてない。恐らく、ベートーベンはヨゼフィーネの訃報に接し、深い悲しみに陥ったであろう。彼もその時、病魔と闘争していたのである。その死闘の中で、ヨゼフィーネへの想いを最後のピアノ・ソナタ第32番（ジャズ・ソナタ；1821年）に集大成するのである。即ち、最終楽章の主題（アリエッタ）は、黒人霊歌を思わせ、来世への希望を歌ったものである。

このソナタの最終楽章（第3変奏にジャズの原型がある）は、ヨゼフィーネと再会する来世を描いたものであろう。これまで、必死に彼女と結ばれることを望み、努力したかいなく失った彼女を思慕して来世を描いたものであろう。この楽章は、彼女と来世で、やっと一緒に幸福な生活を暮らす事が出来る希望を歌ったもの、と解釈したい！

ベートーベンの後半の人生の、20年以上にわたって彼の創造力に影響を与えた女性が存在していたとは大きな驚きである！ ベートーベンは、少なからずの女性と恋に陥るが、その中でも理想の女性像をヨゼフィーネに見い出したのであろう！ このことは、真の恋は、人生の中で一度だけ経験することを私達に教えている。母の姿が、彼女に2重写しに観えたのかも知れない。

幸いなことに、私達はベートーベンの作品から、彼自身のみならず、ヨゼフィーネの人間像を鮮明に描き出すことが出来る！ 彼女の肉声をも！！ それは、正しく聴く者の理想の女性の姿である！

（たこう まさくに：農学部教授）